

小・中学校道徳研究部

I 研究主題

ねらいに迫る 道徳の授業の工夫 ―教科化に向けた道徳の時間の充実を目指して―

II 主題設定の理由

現代社会は、日々大きく変化し、科学技術の発達や高度情報化社会の実現により、私たちはより豊かで便利な生活を送っている。しかし、その一方で、犯罪の低年齢化や不登校、ネットいじめなど、子どもたちにかかわる様々な社会的問題が次々に起きていることも事実である。これらの社会的問題の原因として、子どもたちの健全な心の育成が不十分であることが考えられる。だからこそ、平成30・31年度から始まる「特別な教科 道徳」が道徳教育の要として有効に機能することが不可欠である。平成27年7月に発表された学習指導要領解説「特別な教科道徳編」にも、児童生徒が現実の困難な問題に主体的に対処することのできる実効性ある力を育成していく上で、道徳教育も大きな役割を果たすことが強く求められたことが示されている。

そこで、今回の研究では、「ねらいに迫る道徳の授業の工夫」と題して、道徳の教科化を念頭に、誰でもすぐに実践できる効果的な指導方法を研究しようと考えた。また、児童の実態を十分に把握し、より効果的な学習指導過程を考えていきたい。

III 研究の内容

「言語活動を充実させ主体的に学習に取り組む児童生徒の育成」



道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深める観点から、書く活動や語り合う活動など、一人一人の感じ方や考え方を表現する機会を充実し、自らの道徳的な成長を実感できるようにする。



道徳の時間をより充実させるために・・・「ねらいに迫る道徳の授業」をする。

①児童生徒の実態把握 ②指導方法の工夫 ③ねらいに迫る発問の工夫

① 児童生徒の実態把握

道徳に関するアンケートを取ったり、日頃の生活の様子をよく把握したりし、児童生徒の実態をつかむことによって、ねらいとする価値に迫るための効果的な導入、終末、授業方法等を考える。

② 指導方法の工夫

教材提示、発問、話し合い、書く活動、表現活動、板書、説話等を、意図的に工夫することで、児童生徒が主体的に学ぶ道徳の授業をつくる。

③ ねらいに迫る発問の工夫

児童生徒が、1つの発問に対してどのような反応をするのか考え、発問を組み立てることでねらいに迫る発問をする。

IV 実践例

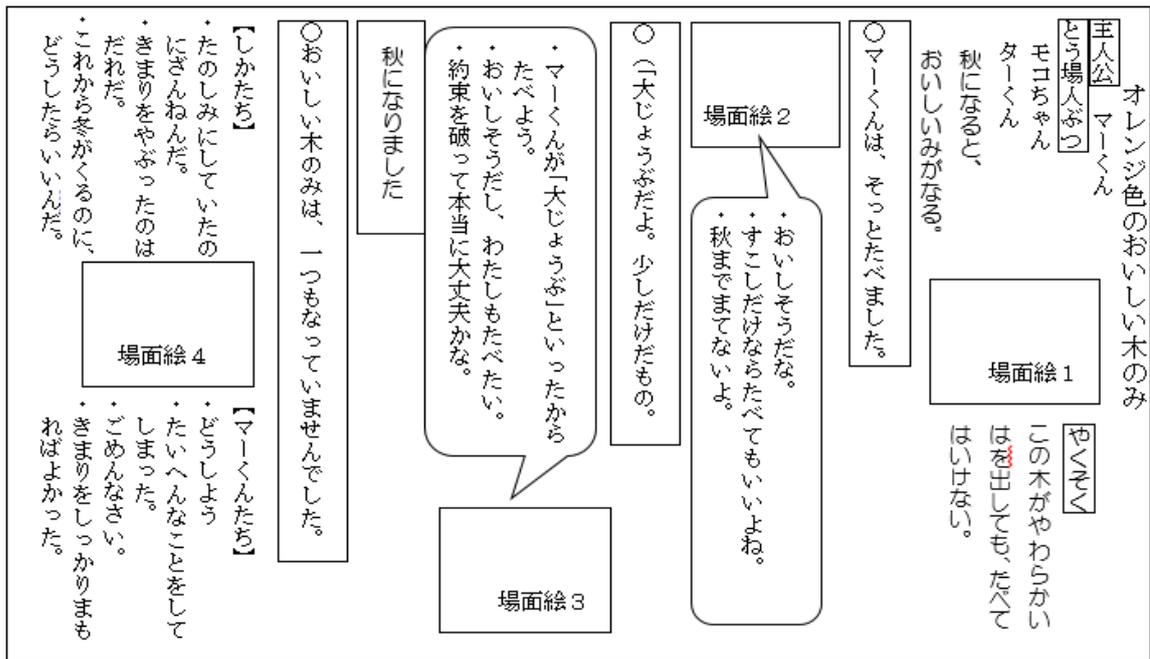
実践例1 小学校2学年 規則尊重4—(1)

- 1 主題名 みんながまもらないと 4—(1)
- 2 資料名 オレンジ色のおいしい木のみ
- 3 ねらい みんなで使うものの大切さに気づき、一人一人がしっかり約束やきまりを守ろうとする態度を育てる。

4 展開

	学習活動・主な発問・手立て	予想される児童の反応	指導上の留意点*評価の観点
導入	1 学校生活の中で、どんな約束や、決まりがあるか話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・廊下は走らない。 ・先生や友達の話は「めいほう」で聞く。 ・自習のときは静かに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の生活を想起させ、ねらいとする価値への方向付けを図る。
展開	<p>2 資料「オレンジ色のおいしい木のみ」を読んで、子じかのマーくんを中心としたしかたちの考えたことについて話し合う。</p> <p>① 「マーくんがやわらかいはっぱを食べたのはどんな気持ちがあったからでしょう。」</p> <p>② 「『大丈夫だよ。少しだけだよ。』と言われたモコちゃんはどんなことを考えたでしょう。」 ワークシートに記入する。</p> <p>③ おいしい木のみが一つもなくなって見えないのを見て、しかたちはどんな気持ちでしょう。</p> <p>③' 「マーくん、モコちゃん、ターくんたちは、どんなことを考えたでしょう。」(補助)</p> <p>3 今日の学習で感じたことや考えたことを話し合う。(登場人物へ言ってあげたいこと)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・おいしそうだな。 ・少しだけなら食べてもいいよね。 ・秋まで待てないよ。 ・マーくんが「大丈夫」といってるから食べようかな。 ・おいしそうだし、私も食べたい。 ・自分だけ食べないのは損だ。 ・約束を破って本当に大丈夫かな。 ・やっぱり食べるのはやめよう。 ・楽しみにしていたのに残念だ。 ・困ったな。 ・決まりを破ったのはだれだ。 ・これから冬が来るのに、どうしたらいいんだ。 ・どうしよう。大変なことをしてしまった。 ・ごめんなさい。 ・決まりをしっかり守ればよかった。 ・みんなに迷惑をかけてしまった。 ・マーくん、きちんと約束を守ればこんなことにならなかったね。次は守ろうね。 ・モコちゃん、あの時、マーくんに「約束を守らなきゃいけないよ。」と言えよよかったね。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物と約束ごとをしっかりとおさえる。 ・「少しだけなら大丈夫。」という安易な考えで自分勝手な行動をとってしまった気持ちに共感させる。 手立て①ペープサート ・役割演技を取り入れ、登場人物の揺れ動く気持ちを考えさせる。 手立て②ワークシート 手立て③役割演技 ・決まりを破ったものたちにより、迷惑を感じたしかたちの気持ちに共感させる。 手立て①ペープサート ・決まりを破ったことで、仲間たちに迷惑をかけ、後悔した子じかたちの気持ちを押さえる。 *約束や決まりは、生活を守るためにあり、守らないと他人にも迷惑がかかってしまうことを感じ取ることができたか。 (発言・表情) *約束や決まりを守って生活する良さに気づけたか。 (発言・表情)
終末	4 教師の説話を聞く。		<ul style="list-style-type: none"> ・約束や決まりを守って生活している様子を語ることにより、約束や決まりを守ろうとする思いがもてるようにする。

○板書計画



5 考察

【成果】

- ・始めに場面設定を丁寧におさえることで、子どもたちにとって話の内容が分かりやすく気持ちが入り込み、たくさん手が挙がり、多くの意見が出た。
- ・ペープサートを用いることで、混乱なくそれぞれの登場人物の気持ちを想像することができていた。
- ・ワークシートをセリフ形式にすることで、考えやすくなり気持ちをたくさん書いていた。葛藤する気持ちも書くことができた。
- ・自分を振り返る場面では、全ての児童が「決まりを守ることが大切」「決まりを破って後悔している。」というようにねらいにあった感想(手紙)が書けていた。

【課題】

- ・「決まりを守る」ことの大切さは理解できていたが、その理由が「自分が実を食べられなくなってしまおう」といった自分が中心となる意見が多かった。「みんなのためになる」というところをおさえられた児童は全体の10%程だった。
- ・役割演技を書かせる活動のあとに行うと、それにこだわりすぎてしまうことがあり、アドリブが難しくなるときがある。
- ・中心発問に時間をかけられると良い。

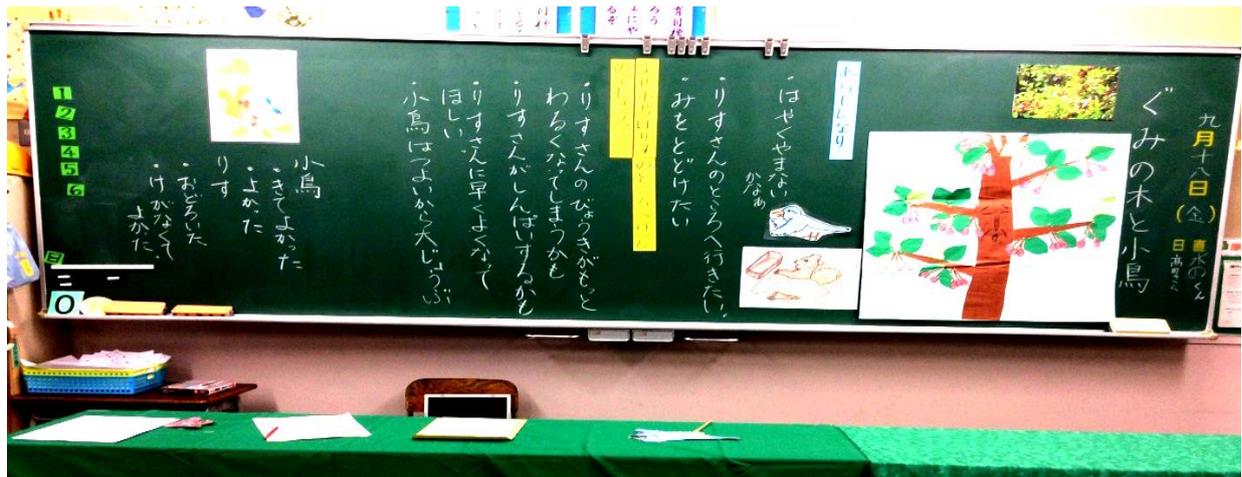
実践例2 小学校2学年 思いやり・親切2－(2)

- 1 主題名 思いやりの心 2－(2)
- 2 資料名 ぐみの木と小鳥
- 3 ねらい 困っている人や弱い立場の人を思いやり、温かい心で接し、進んで親切にしようとする態度を養う。

4 展開

	学習の流れ	児童の反応	○指導上の留意点 ・教師の支援 ※評価
導入	1 資料に登場するぐみの木や小鳥やりすについて知っていることを話し合う。	・小鳥：かわいい・小さい ・りす：すばしっこい	○ぐみの木の写真を見せて紹介し、親近感を覚えさせる。 ○資料への興味付けを図る。
展開	2 資料の紹介 3 資料の範読を聞く。 4 内容について話し合う。 ① 「小鳥がりすにぐみの実を持って行ったのはどんな気持ちがあったからでしょう。」 ② 「いつまでもやみそうにない嵐を見ながら、小鳥はどんなことを考えたでしょう。」 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">③ 「なぜ小鳥はりすのところへ行っただけでしょう。」</div> ④ 「りすのところについたとき、小鳥とりすはどんな気持ちだったでしょう。」 5 今までに親切にしてよかったことはありますか。また、他の人が親切にしているいなと思ったことはありますか。	・登場人物や条件・状況を知る。 ・主人公の気持ちを考えながら、聴く。 ・辛そうだったな。 ・僕が実を届ければ、りすさんはもっと元気になる。 ・ひどい嵐だな。今日は行くのをやめよう。 ・こんな嵐では、羽がぬれて飛べないや。 ・りすさんや、嵐の中立っているぐみの木さんのために行きたいけど、僕が怪我したらいやだなあ。 ・大変だけど、りすさん待っているから行こう。 ・病気のりすさんを喜ばせるために行った。 ・りすさんのことが心配だから。 ・りすさんが待っているかもしれないから。 ・嵐の中を飛ぶのは大変だったけど、りすさんがもうすぐ元気になりそうでよかった。 ・ぼくのために、こんなひどい嵐の中を、ありがとう。 ・友達がけがをした時に、保健室に連れて行った。 ・体育帽が見つからない友達と一緒に探した。 ・電車で席を譲っている人がいた。	手立て① ペープサート、効果音を用いた範読 ・主人公への共感が高められるよう、範読する。 ○小鳥のペープサートを使い、りすのことを心配している小鳥に共感させる。 ○少しでも早くりすを元気づけたい気持ちと、嵐の中を飛んでいく不安な気持ちの両方をもつ小鳥の心の内に共感させる。りすへの思いから、決心をした小鳥の気持ちをとらえる。 手立て② テーマ発問 ○小鳥がりすを思いやる気持ちを捉えさせる。 ※小鳥のりすを思いやる気持ちをとらえることができたか。 手立て③ 複数の登場人物の気持ちを考えさせる ○りすを思いやる小鳥の気持ちを捉えさせ、親切に感謝しているりすの気持ちを考えさせる。 ○親切にしたこと、されたことの両方を素直に出させる。 ※親切にする心、親切にされた時の心を感じ取ることができたか。
終末	6 校長先生からの手紙を読む。		・人生の先輩である校長の経験を聞くことで、価値に対する考えを深めさせ、実践化への意欲付けをする。

○板書計画



5 考察

【成果】

- ・ペープサートや効果音を範読に用いることで、児童に興味を持たせ、集中して聞かせる事ができた。
- ・テーマ発問を取り入れることで、ねらいとする価値に近づく発言を児童から引き出すことができた。
- ・親切にする側とされる側の両方の気持ちを考えさせることで、ねらいとする価値を深めることができた。

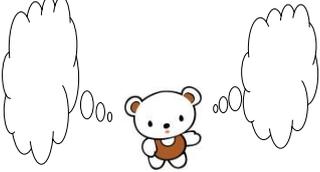
【課題】

- ・場面発問をした際、発表する児童が限られてしまった。
⇒ペープサートを用いた役割演技を取り入れることで発表しやすくなるを考える。
- ・葛藤場面で小鳥の気持ちを考えさせた際、片方の気持ちに偏ってしまった。
⇒補助発問を練ることで、両方の気持ちを十分に共感させることができると考える。
- ・ワークシートを書かせた際、自分が親切にしたことを児童のほとんどが書けなかった。
⇒友達やお兄さん、お姉さんに親切にしてもらったことを書かせることで、自分のことを振りかえることができると考える。
⇒小鳥のよかったところを手紙に書かせることで、ねらいとする価値を深められると考える。

道徳の授業研究を通して、道徳は学級経営と密接に関わりあっていることを強く感じた。4月当初に自分のクラスで道徳の授業を行った時と比べ、研究員同士で研究を重ね、授業を行うたびに児童の様子が変わってきた。話の聞き方や発表の仕方などが上手になり、「私も同じように思う。」「僕はちょっと違うな。」と言ったつぶやきも増え、積極的に授業に参加しようとするようになった。また、そのような児童の姿が他の教科でも見られた。これからも道徳を研究し、児童が積極的に参加したくなる授業を展開できるようにしていきたいと思う。

実践例3 小学校2学年 思いやり・親切2—(2)

- 1 主題名 温かいやさしさ 2—(2)
- 2 資料名 くまくんのたからもの
- 3 ねらい 幼い人や友人に温かい心で接し、思いやりを持って親切にしようとする心情を育てる。
- 4 展開

	学習活動	予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1 自分の宝物について発表する。 ○みなさんの宝物は何ですか。	<ul style="list-style-type: none"> ・買ってもらったおもちゃ ・ゲーム機 ・大切にしているぬいぐるみ 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の宝物を挙げて、展開において資料のくまくんの気持ちをとらえる。
展開	2 資料の条件・情況について知る。		<ul style="list-style-type: none"> ☆主人公のくまくんや、ねずみくんの絵、小道具等を貼ることで、登場人物の気持ちに入り込みやすくする。
	<p>主人公…くまくん その他の登場人物…ねずみくん 条件・情況…くまくんは、新しいかばんに宝物をひろっていっぱいになっている。その時、穴に落ちたねずみの子を見つける。ねずみの子を助けるためには、宝物を捨ててかばんにねずみくんを入れないといけない。</p> <p>3 資料の筆話を聞き、くまくんになって考える。</p> <p>① かばんが宝物でいっぱいになった時、くまくんはどんな気持ちだろう。</p> <p>② 物がかばんに入っているのを出した時、くまくんはどんなことを考えたのだろう。</p>  <p>③ 温かいどんぐりをかばんにしまった時、くまくんはどんなことを考えていたのだろう。</p> <p>④ どうして一つでも特別な宝物なのだろう。</p> <p>4 友だちにされてうれしかったことはあるだろうか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・たくさん見つけたぞ。 ・もってかばんに宝物を入れたいな。 ・宝物でいっぱいになってうれしいな。 ・他の人にはあげたくない。 ・一生懸命合ったから、捨てるのはもったいな。 ・ねずみくんも助けてほしい、宝物も捨てたくないな。 ・また拾えばいい。 ・ねずみくんを助けるほうが大切だ。 ・ねずみくんを助けられてよかった。 ・ねずみくんが、ぼくのために捨ててくれてくれてうれしいな。 ・親切にしてくれた。 ・ねずみくんやさしいな。 ・ねずみくんのお礼の気持ちが詰まっているから。 ・友だちに遊ぼうと言われてうれしかった。 ・忘れ物をしたときに物を貸してもらってうれしかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆場面絵を用い、場面設定を押さえることで、主人公の気持ちに迫らせる。 ・たくさん宝物を手に入れた喜びを押さえ、中心発問でそれらを手放すときの葛藤がわかるようにする。 ・がんばって集めた宝物と、困っているねずみくんを助けた気持ちの間で揺れ動くくまくんの気持ちをとらえる。 ☆ワークシートを活用することで、考えを整理しやすくし、どの児童も自分の考えを持てるようにする。 ・たくさん宝物と、一つの宝物を対比させ、なぜくまくんが満足感を得ているのかを考えられるようにする。 ・子どもから出た意見を受けて、全体でそういうことをしたことがあるかどうか聞く。
終末	5 教師の話を聞く。		<ul style="list-style-type: none"> ・クラスで見つけた親切な行為について話す。

○板書計画



5 考察

【成果】

- ・資料の条件・状況を示し、主人公の絵を貼ることで物語の流れを把握しやすくなり、主人公の気持ちに入りやすくなった。
- ・ワークシートに書かせることで、自分の考えを整理し相手に伝えやすい言葉として表現しやすくなった。
- ・ワークシートを活用することで児童の考えを把握しやすくなり、意図的な指名を行うことができた。宝物を捨てることへ抵抗を覚える意見から、迷う意見、ねずみを助けようと決心する意見など、様々な意見を全員で共有することができた。
- ・自分たちのことを振り返り友だちの良いところを発表する場面では、友だちに自分の良いところを言ってもらい認めてもらった嬉しさだけでなく、友だちのことを言ってあげられたという満足感をそれぞれが感じる事ができた。

【課題】

- ・導入では“家族”や“命”など捨てることのできないものを宝物として発言してしまう児童もいたので、物に限定して発問する必要がある。
- ・場面絵を、設問ごとに黒板に貼っていったが、範読の時に貼っていった方が状況がよりわかりやすかった。
- ・中心発問では、「ねずみくんの命が大切だから助ける。」というように命の大切さについての発言もあった。「相手が困っているから助けたい。」というような本時の主題である相手への思いやりについての思考が深められるような教師からの問いかけが必要である。
- ・ワークシートでは二つの吹き出しを作り、宝物を捨てたくないという気持ちと、捨てようと決心したときの気持ちを書き分けられるように意図して作った。しかし、実際子どもたちは二つの吹き出しを一つとして捉えて書いていたので、吹き出しにそれぞれの気持ちを表すキーワード「でも、だからものはすてられないな。」「ええい。」といったものを予め作っておけば、主人公の葛藤をさらに深く考えられたのではないだろうか。

実践例4 中学校1学年 きまり4—(1)

- 1 主題名 きまりを守る 4—(1)
- 2 資料名 「二通の手紙」(文部科学省『私たちの道徳 中学校』)
- 3 ねらい きまりを遵守し、確実に義務を果たすことで、より良い社会をつくろうとする態度を養う。

4 展開

	学習活動・主な発問	予想される生徒の反応	指導上の留意点 評価の観点(★)
導入	1 校則について話し合う。 ○「校則について、どのようなイメージをお持ちですか。」	<ul style="list-style-type: none"> ・あった方がいい。 ・全体の秩序のために必要。 ・必要ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな意見も受容して、活発に自由に発言できる雰囲気をつくる。
展開	2 資料の範読を聞く。 3 感想を発表する。 4 内容について話し合う。 ① あなたなら、元さんと同じ行動をとりますか。 【手立て①】 ② 佐々木さんは、元さんからどのようなことを学んだのだろう。 5 きまりについての自分の考えをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・姉弟のために入園させた元さんの行動はえらい。 ・元さんは姉弟を入園させて本当に良かったのかな。 ・動物園のきまりは守らなければいけない。 <とる> <ul style="list-style-type: none"> ・姉弟の思い出のために。 ・姉弟がかわいそうだから。 ・母親が感謝していたから。 ・仲間も納得していたから。 <とらない> <ul style="list-style-type: none"> ・きまりがあるから。 ・周囲の人に迷惑をかけたから。 ・結果的に仕事を辞めたから。 <ul style="list-style-type: none"> ・悩むこともあるけど、どんなときもきまりは守らなければいけない。 ・きまりを守らないと、自分や他の人が困ってしまう。 ・動物園のきまりをまもるために、迷ったけど処分を出すしかなかった。 ・一回破られたきまりを認めてしまうと、何でもありになってしまうから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に資料を配布し、概要を生徒にとらえさせておく。 ・元さんの行動の問題点(姉弟を入園させたこと)についてとらえさせ、以後の発問につなげる。 <ul style="list-style-type: none"> ・封筒と場面絵を掲示する。 ・生徒の意見をつないでいく。 ・心情グラフを配布し、自分の気持ちを可視化させる。 【手立て②】 <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートに記入させる。 【手立て③】 <ul style="list-style-type: none"> ★元さんの迷う気持ちに共感することができたか。 ・佐々木さんの視点から元さんの行動をとらえ、きまりを守ることについての考えを深める。 ・上司の葛藤にも触れることで、どんな場合でも、全体のことを考えてきまりを守る必要があることを考えさせる。 ・心情グラフで、自分の気持ちを可視化させる。【手立て②】 ・ワークシートに記入させる。 【手立て③】 <ul style="list-style-type: none"> ・何人かの生徒にまとめた内容を発表させる。 ★きまりの意義について、真剣に考えることができたか。
終末	教師の話聞く。		<ul style="list-style-type: none"> ・教師自身が中学生時代に経験したきまりについてのエピソードを話すことで、きまりを守ることの大切さについて共感させる。

○ 板書計画

封筒
(懲戒処分
の通告)

赤

青

一通の手紙

・・・

とらな

封筒
(母親からの
手紙)



①あなたなら、元さんと同じ行動をとりますか。

とらな

- ・姉弟の思い出のために。
- ・姉弟がかわいそうだから。
- ・母親が感謝していたから。
- ・仲間も納得していたから。

とらな

- ・きまりがあるから。
- ・周囲の人に迷惑をかけたから。
- ・結果的に仕事を辞めたから。

の佐々木さんは、元さんからのどのようなことを学んだのだろう。

- ・悩むこともあるけど、どんなときもきまりは守らなければいけない。
- ・きまりを守らないと、自分や他の人が困ってしまう。
- ・動物園のきまりをまもるために、迷ったけど処分を出すしかなかった。
- ・一回破られたきまりを認めてしまうと、何でもありになってしまうから。

5 考察

【成果】

- ・テーマ発問を取り入れたことで、ねらいとする価値（きまり）について、それぞれの考えを出し合うことができた。
- ・心情グラフを用いたことで生徒個人の考えや学級全体の考えを捉えることができた。そのため、教師の意図的な指名をスムーズに行うことができた。
- ・座席の隊形をコの字形にしたことで、お互いの考えや表情を見合うことができた。

【課題】

- ・テーマ発問に対して、意見交換が十分ではなく、ねらいとする価値について深めることができなかった。座席の隊形をコの字型にしたことを生かして、近くの級友と話し合う時間を設けることができれば良かった。
- ・テーマ発問に対して意欲的に考え、発表し合っていたことから、発問をテーマ発問にしぼって展開を進めても良かった。
- ・個人の思考の変容を捉えるために、展開を進める中で、それぞれの心情グラフの割合を変える時間をより多く設けられると良かった。
- ・「場合によっては、きまりを守らなくても良い」という感想もあり、ねらいとする価値にせまることが難しかった。



V まとめと課題

今回の研究では、学習指導過程をどのように工夫すれば、より効果的にねらいに迫ることができるのか検証していった。子ども達が、教師と1対1のやり取りになるのではなく、道徳性の意義について自ら考え、理解し、主体的に学習に取り組むことができるような授業展開を工夫した。研究員の検証授業を終え、以下に研究の成果を3点述べる。

1 教材提示について

教材提示は、子ども達はその教材によって想像や共感をかき立てられ、問題意識をもつ道徳の時間の重要な役割を担っている。だからこそ、児童の実態を十分に把握し、提示する必要があると考える。今回は、黒板を舞台のようにして提示する方法や、視聴覚機器を用いた提示、ペープサートと場面絵を用いた提示方法を試みた。

どの授業も子ども達は、教材の世界に入り込んでいくことができた。特に、複数の登場人物の心情を問う場面では、混乱することもなく、効果的な提示であったと考えられる。

2 書く活動について

子ども達は、書くことによって自分の考えが整理されることが多い。また、書くことによって自分の考えをもって安心して発表することができる。そこで、今回は、書かせてから発表させる場面もほとんどの実践で取り組んでみた。

低学年では、吹き出しを設けてワークシートに書かせる活動を行った。中学校では、ディベート前に自分の立場をはっきりさせられるように、肯定、否定、理由なども書かせる活動を行った。

書かせることで、自分の意見はまとまり、友だちの意見に対しても共感することができたり、違った感じ方を受け止めたりすることができていた。

3 話し合いについて

話し合いは、子ども達の多様な考えを学び合い、深め合う大切な活動である。子ども達が単なるおしゃべりにならないよう、ねらいとする価値を常に意識して話し合わせる事が重要である。低学年では、ペアでの話し合いをしたり、教師が中心となって子どもから出た意見を広げたりすることができた。中学校では、一つのテーマについてディベート形式で自分の意見を述べていくことができ、ねらいとする価値に近づくことができた。

今回の研究では、ねらいに迫る道徳の授業をするために、これまでにあまり試みたことのない授業の学習過程を構想し、実践した。そのために、発問を精選し、教材提示を工夫して、書くことや話し合う活動を盛り込んだ授業を行い、言語活動の一層の充実を図ることができた。反面、時間配分が上手くいかなかったり、終末の工夫が疎かになってしまったりした。週に1時間しかない道徳を、今後「特別の教科 道徳」として、どのように進めていかなければならないか、様々な方法で取り組みながら、児童の実態に合わせて実践していくことが大切である。